石川県立美術館だより

第313号　平成21年11月1日発行

BIJUTSUKAN DAYORI

第56回日本伝統工芸展金沢展
日本工芸会新人賞　中田博士「真珠光彩壺」

石川県の名宝
重文　黒漆螺鈿鞍　白山比咩神社蔵

第56回日本伝統工芸展金沢展

- 特別陳列　前田家の渡来織物好み　　前田育徳会尊經閣文庫分館
- 特集展示　石川県の名宝　－国宝・重文・県文－　　第2展示室
- 特集展示　1950年代、日本画のうけた風　　第6展示室
- 再興第94回院展金沢展

- 企画展 Topics
- コレクション展示室－主な作品
- ミュージアムレポート
- 行事案内
- 所蔵品紹介
- ミュージアムショップ通信

第56回

日本伝統工芸展金沢展

10月30日(金)～11月8日(日)会期中無休　開館時間　9：30~18：00
※最終日(8日)は午後5時まで

主催:石川県教育委員会、日本放送協会、朝日新聞社、北國新聞社、日本工芸会
後援:文化庁、富山県教育委員会、福井県教育委員会

我が国は、四季の気候条件に恵まれ、多様な自然環境を形成しています。その中で、各地の風土に根ざした工芸品が生み出され、伝統技術を大切に継承し発展させてきました。本展は、この優れた伝統技術の保護と後継者の育成、ならびに伝統工芸に対する普及を目的として、毎年開催されるものです。

今回は、陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・人形・諸工芸（七宝・硝子・截金など）の七部門の入選作品七三五点の中から、重要無形文化財保持者・受賞者等の作品と、北陸三県、及びその他の地元の入選作品を含め、約三五〇点を展示します。

今年の石川県の入選者は七十六人で、そのうち陶芸部門で中田博士氏が、日本工芸会新人賞を受賞しました。

◆観覧料

個人	一　般	600円
	大学生	400円
	高校生以下	無料
団体（20名以上）	一　般	500円
	大学生	300円
	高校生以下	無料

※当館友の会会員は、受付での会員証提示により団体料金になります。

講　演　会

演　　題　「備前焼　その伝統と創造」
講　　師　伊勢﨑　淳 氏（陶芸家・重要無形文化財保持者）
日　　時　11月１日(日)　午後１時30分～
会　　場　美術館ホール　＜入場無料＞

列品解説

日　　時	11：00～	13：30～
１０／３１(土)	《染　織》木場　紀子	《漆　芸》林　　暁
１１／　１(日)	《金　工》大澤　光民	
２(月)	《陶　芸》吉田　美統	《木竹工》川北　浩彦
３(火・祝)	《陶　芸》武腰　　潤	《染　織》二塚　長生
４(水)	《陶　芸》中田　一於	《漆　芸》前　　史雄
５(木)		
６(金)	《金　工》魚住　為楽	《人　形》紺谷　　力
７(土)	《木竹工》福嶋　則夫	《漆　芸》小森　邦衛
８(日)	《木竹工》川北　良造	石川県立美術館長　嶋崎　丞

耀彩多面壺「恒河」　徳田八十吉

釉裏金彩更紗文花瓶　吉田美統

沈金箱「烟雨」　前　史雄

曲輪造朱彩菓子器　小森邦衛

砂張文様水指　魚住為楽

象嵌朧銀花器「雨後山影」　中川　衛

神代欅点紋挽盛器　川北良造

前田家の渡来織物好み

10月29日（木）～11月25日（水）会期中無休

「騎羊人物椿梅折枝文様金襴」

《名物裂》中国の宋・元・明・清の時代に製織され、鎌倉・室町時代から江戸時代中期にかけて日本に渡来し、わが国の茶道をはじめ近世文化の成立に影響を与えた織物類の固有名称です。その種類は、金襴、緞子、間道、錦、風通、繻珍、ビロード、印金、モール、更紗などがあります。書画の表装裂や、名物茶道具の仕覆として用いられ、当時の優れた鑑識眼をもつ茶人たちによって選択されたものです。

《前田家と名物裂》三代藩主前田利常が、寛永十四年（一六三七）、当時唯一の海外への窓口であった長崎へ家臣を遣わせ、買い求めさせたといわれています。利常は、オランダへデルフト陶のやきものを注文するなど、文化大名としてのスケールの大きさがありましたが、この名物裂収集もその美意識のあらわれといえましょう。

《小堀遠州と名物裂》茶の湯にも関心を寄せていた利常は、遠州との交流も深く、茶器の購入を相談したり、点前や道具について遠州に教示を受けています。遠州は名物裂帖「文龍（もんりょう）」を作製しています。これは名物茶道具に用いた「好み裂」の裁ち残りを、そのまま見本として保存したもので、名物裂の名を生じさせた根本資料ともいえるものです。遠州によって確立された「好み裂」の美の基準は、後世の名物裂の基準ともなっています。

《展示作品》金襴、緞子、錦、間道など三十八点を展示しますが、異国情緒あふれる文様が、華やかな金襴で表された**「騎羊人物椿梅折枝文様金襴」**や、幾何学文様で鹿文や馬文、雲龍文を表した三種類の**「有栖川錦」**をはじめ、ビロードや縞木綿など反物の状態で所蔵されている作品が十一点含まれています。

利常と遠州という二人の茶人によって生まれたと言っても過言ではない、洗練された美の世界をご堪能下さい。

学芸員の眼

名物裂は、一寸（三・〇三cm）四方の単位でその価値が判断されるほど貴重なものでした。それゆえ、今回展示するような反物の状態で残っていることから、前田家の文化レベルの高さに改めて感心させられます。しかし、こうした裂類は表具裂や仕覆など、絵画や茶道具などの作品をひき立てるために仕立てられて、はじめて表舞台に出るものです。二十五日に好評のうちに終了した「久隅守景展」を鑑賞された際に、ある作品の表具に大変感動された方がいらっしゃいましたが、そうした作品の楽しみ方も、鑑賞の重要なポイントです。本展は純粋に名物裂を主役として鑑賞いただく展示ですので、前田家の美への旺盛な探求心を再認識いただけるものと思います。

前田育徳会尊経閣文庫分館

第2展示室

石川の名宝

－国宝・重文・県文－

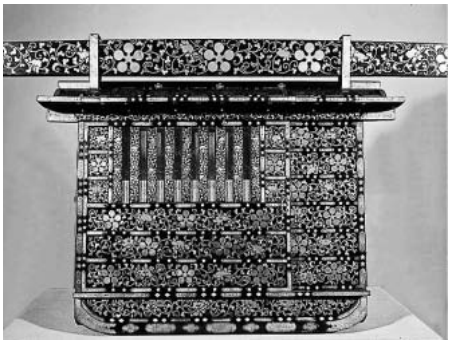
10月29日（木）～11月25日（水）
会期中無休

石川県には、歴史的あるいは芸術的に優れた文化財が数多く伝えられています。これは、江戸時代に加賀藩主としてこの地を支配した、前田家の文化的施策が大きな要因の一つであると言われています。そしてこうした歴史的背景を基盤とするところの石川の文化風土は、芸術・文化全般に対する高い関心というかたちで今日に引き継がれています。

能登地区は日本海の海上交通により、大陸との接触が早くから行われたため、歴史的な風土や文化を色濃く物語るものを中心とした文化財が残されています。一方、加賀地区では、古代・中世において白山信仰の中心であったことや、中央の社寺の荘園として開かれたことにより、それを反映する文化財が残っています。また、前田家が加賀藩主となって文化の展開をみせて以降は、前田家を中心とする収集・育成された文化財が伝えられています。

当館ではこうした文化財、とりわけ美術工芸品を中心に収集活動を行っており、ほかに保存と活用を目的として、県内の社寺や個人の方々から、指定文化財を含む多くの作品の寄託を受けています。

今回の展示は、こうした石川県の貴重な文化遺産の一端を知っていただくとともに、文化財保護法に基づく今年度の国宝・重要文化財の公開として行うもので、それに石川県指定文化財を含め、館蔵品、寄託品の中から、国宝一点、重要文化財十点、石川県指定文化財九点、あわせて二十点を展示します。



蒔絵梅鉢紋女儀御輿（部分）

第6展示室

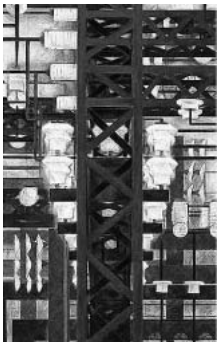
1950年代、日本画の受けた風

10月29日（木）～11月25日（水）
会期中無休

一九四〇年代から五〇年代、ヨーロッパやアメリカではアンフォルメルや抽象表現主義が、大きな風となって全盛を迎えます。その風は日本にも上陸し、一九五〇年代から六〇年代にかけて日本のアートシーンの様々な分野を暴風となって席巻しました。いわゆる日本における抽象画の全盛時代です。戦争を境に大きく世界や日本の枠組みがチェンジする中、アートにおけるチェンジもまた必然であったのかもしれません。

日本画は、主題から技術や材料に至るまで、歴史と伝統に立脚したものであり、抽象的表現とは相容れないもののように思われます。しかし、すでに創造美術（現・創画会）では従来の伝統的な表現を打ち壊すような作品を発表していましたし、日展においても多くの作家が抽象表現に傾倒していきました。見える形に依らない、いわば「完全な抽象」を制作する日本画家もいましたが、具象表現に幾何学的構成やキュービズムを取り入れた作家も多かったようです。このように、多くの日本画家がこの時期、「日本画と抽象」という問題に葛藤したのです。

今回の特集では、当館所蔵作品のうちから、一九五〇～六〇年代の作品で抽象表現に影響を受けたと思われる作品と、その前後の作品を比較陳列します。どの様な風が日本画にどの様に影響を与えたのか、鑑賞者自身の眼で感じ取っていただきたく思います。



下村正一　送電柱

第7~9展示室

再興第94回院展 金沢展

11月12日(木)～11月25日(水)
会期中無休

主催／財団法人日本美術院、北國新聞社、石川県立美術館、財団法人　石川県芸術文化協会

現代日本画壇の最高峰の作品を網羅した「院展」を三年ぶりに金沢で開催します。九月に東京都美術館で開かれた本展から、松尾敏男、郷倉和子、那波多目功一、清水達三（以上日本芸術院会員）、平山郁夫、下田義寛の各氏ら大家、人気作家の代表作に一般応募の入選作を合わせた九十六点を一堂に展示します。

◇入場料　一　般　一、〇〇〇円（八〇〇円）
中高生　六〇〇円（四〇〇円）
小学生　五〇〇円（三〇〇円）
（　）内は団体料金

※当館友の会会員は、会員証提示により団体料金になります。

◇連絡先　金沢市南町二－一
北國新聞事業局

平山郁夫
文明の十字路を往く－アナトリア高原 カッパドキア トルコ

企画展 Topics［第1回］

遠き道展
－伝えたい日本画の今－

平成22年1月4日(月)～2月7日(日)
会期中無休

「遠き道展」は平成二十年一月にスタートし、全国を二年かけてまわる予定の巡回展で、現在までに全国十会場で開催されています。当館では「遠き道展　－伝えたい日本画の今－」として明年一月に開催されます。この展覧会では「現代日本画」の普及と「視覚障害のある観客に対しての平面鑑賞」の普及という二つの「普及」を柱として構成されています。今号では「現代日本画」の普及に焦点を当て紹介いたします。

本展は日本画の展覧会ですが、その特徴は「出品作家の多彩な顔ぶれ」といえるでしょう。三十名を超える出品予定の作家は、公募団体などの枠組みを超えた、実力のある作家ばかりです。たとえば日展の土屋禮一、院展の那波多目功一、創画の小嶋悠司など、各公募展団体を代表する作家、それに無所属で活躍する岡村桂三郎などをあげるとわかりやすいでしょうか。このように公募団体の枠を超え、日本画のトレンドを作っている作品群を、一堂に鑑賞することができる機会も少ないと思います。「現代日本画」を俯瞰することで日本画の展望とその可能性や魅力を知って頂きたく思います。そのことは、今後更に「現代日本画」の普及へとつながるでしょう。我々と同時代を生き、現在も作品を生み続け、日本画界をリードしている実力派の作品約七〇点の大作をどうぞご堪能ください。これまでに開催されてきた各会場でも、会期中に複数回足を運ぶリピーターが多くいたときます。ぜひ日本画の魅力を新たに発見する機会にして下さい。

那波多目功一　惜春

ミュージアムレポート

7月後半から9月にかけて

夏休み親子体験講座

親子体験講座

今夏の親子体験講座は、親子で物作りをする制作体験（七月二十七日～三十一日）と美術館のバックヤードを探検するうらがわ美術館（八月八日）の二本を開設しました。

制作体験の様子から紹介します。低学年は「つみきでひかりのアート」。木っ端を積んで思い思いの形を作り、灯りを点してランプシェードを作りました。子どもはもとより、親御さんの作品もとってもユニーク。暗くして灯りを点けると、うっとりする美しさでした。

中学年は「小さなおりもの作り」。厚紙に巻いた縦糸に横糸を通していくだけで、あら不思議。きれいな織物ができました。思い思いの色の組み合わせは、作り手のパーソナリティでしょうか。また、作品名が振っており「むらさきゆらゆら」「さくらのみち」などなど、素敵でした。

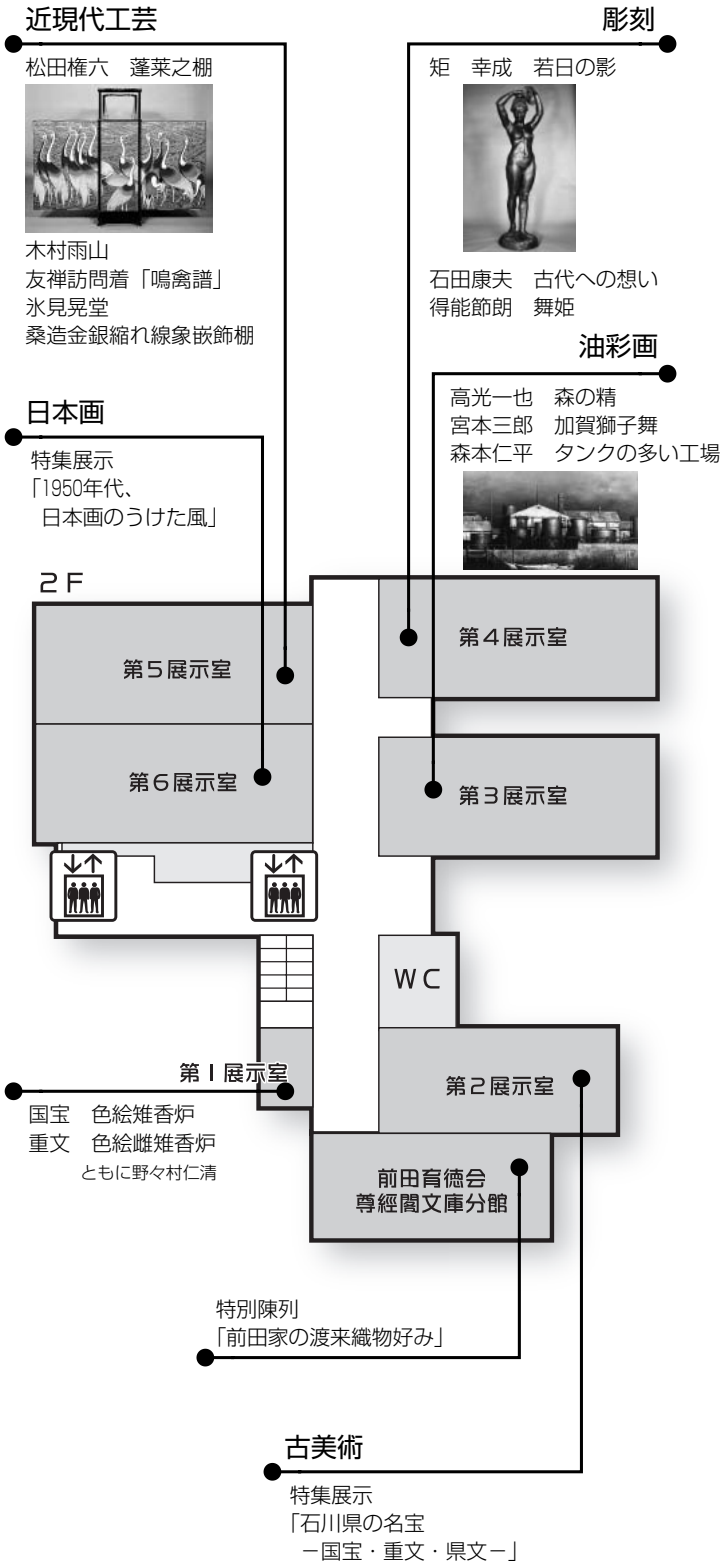
そして、高学年は恒例の「油絵に挑戦！」。初めて油絵の具と格闘するとあって、参加の皆さんは必死の様子でした。でもキャンバスに力強く色をおいていく姿に将来のセザンヌを予感させるこども達も。やはり体験にまさる物はないと、皆さ

夏休み制作体験講座「つみきでひかりのアート」

コレクション展示室

主な展示作品

10月29日（木）～11月25日（水）
会期中無休



バックヤードツアー「免震台の実験」

「ミニ屏風をつくろう！」

ん実感されたようでした。

どきどきしたのは当館初の試み、バックヤードツアー「うらがわ美術館」。「修復工房」に始まり、美術館の心臓部「収蔵庫」までを探検。低学年の子には少々難しいところもあり、次回に向けて改善の余地を残しましたが、中学年以上の皆さんは興味津々。更に親御さんは興味津々でした。作品を載せる免震台の実験では、やっている我々もびっくりの結果でした。

「ミニ屏風をつくろう！」

屏風ってなにするもの？どうなっているの？そんな疑問からスタートした本講座。子どもの描いた絵を、お母さんたちが屏風に仕立てます。和紙を使ったり、蝶番を本物と同じ構造にしたり、「ミニ屏風」とはいえ、なかなかのもの。参加の皆さんは四苦八苦しながらも、その出来映えには満足！大人も楽しい講座でした。

※講座の様子や作品はホームページに掲載中。

学校出前講座「どこでもミュージアム」

学校にお出かけし当館所蔵品で鑑賞授業を行う「どこでもミュージアム」。九月二日に県立養護学校で開催させていただきました。授業を受けてくれたのは高等部の皆さん。蔦健三作「ピアノの廃墟」の前では、じっと作品を見据え、「魔王（シューベルト）が聞こえてくる。」という感想が。森本仁平作「一本橋と外燈」には、感動した面持ちで「この絵は本当にすばらしい。」と、なんとも素直な言葉を聴かせてくれ、美術鑑賞の持つ本質的な価値を思い出させて貰いました。

九月十七日は金沢市立木曳野小学校で開催。三年生の皆さんと対話型鑑賞を楽しみました。三年生という年頃は、作品から受けるイメージをもとに、自由に〝お話〟を展開します。ときおり脱線していく意見にちょっとハラハラしながら、それでも発表をしたり、聴いたりすることを楽しんでいる児童の様子に、美術鑑賞の持つ別の可能性を再認識した次第です。

学校出前講座　木曳野小学校にて

11月の行事案内

■講演会　美術館ホール　十三時三〇分　聴講無料

1日（日）	「備前焼　その伝統と創造」　講師　伊勢﨑淳氏（陶芸家・重要無形文化財「備前焼」保持者）
15日（日）	「古代国家と道路」　講師　近江俊秀氏（文化庁記念物課　文化財調査官）

次回の展覧会

前田育徳会尊経閣文庫分館

「大名夫人の調度」
－婚礼調度を中心に－

第2展示室（古美術）

曹洞宗の名刹
「大乗寺の名宝」

第3展示室（近現代美術）

「田井　淳」
－無限の中へ－

会期：11月29日（日）～
12月23日（水・祝）

坂に建つ街　さかにたつまち　昭和29年 1954年　245㎝×154㎝

所蔵品紹介202

山本　知克　やまもと ともかつ　昭和2年(1927)～平成13年(2003)

題名は見たままの「坂に建つ街」。もしかしたら「無題」や「作品」でもよかったのかも知れません。それほどに、この絵は題名も含めて一切の叙情や物語を寄せつけず、無機的でさえあります。立体や色彩を簡略化した表現からは、時代や国、その背景となるものを見つけ出すことは難しく、見る人によっては、ただ青い空と無人の路地に何ともいえない寂しさを感じるかも知れません。しかし、作者はそんな寂寥感さえも、この絵から排除したいと考えているかのようです。

作者の山本知克氏は、日展において「日本画の前衛」といわれた、堂本印象の画塾・東丘社に身を置き、一時期抽象的な表現に傾倒します。本作はその初期にあたり、形態を簡略化し、街並みというモデルを借りて幾何学的な再構成を試みているようです。氏はこの後の制作において、一層抽象的な表現を強めていき、約十年の歳月を経て再び具象絵画に回帰するのです。

昭和二年、日本画家山本倉丘の長男として京都府に生まれ、昭和二十三年に京都市立美術専門学校を卒業後、堂本印象に師事します。二十八年日展において特選・白寿賞・朝倉賞、二十九年本作にて特選・白寿賞を受賞。金沢美術工芸大学名誉教授。日展評議員。

（第6展示室「1950年代、日本画のうけた風」にて展示中です。）

ミュージアムショップ通信

久隅守景展はいかがでしたでしょうか？「国宝　納涼図」を含む久隅守景の画業をじっくりご覧いただける、またとない機会になったと自負しております。さて最近、守景の当館所蔵品の中から、人気作をチョイスし、絵はがきを作りました。愛らしい姿を的確な運筆で捉えた「笹に兎図」をはじめ、「猿回し図」「重文　四季耕作図屏風」など、いずれも投函せずに手元においておきたくなる出来映えです。値段もお手頃な一枚五十円也。

※左から「重文　四季耕作図屏風」（右隻、左隻）「猿回し図」「笹に兎図」

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　350円(280円)
大学生　280円(220円)
高校生以下　無料
※(　　)内は団体料金

今月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後7:00

石川県立美術館だより　第313号
2009年11月1日発行〈毎月発行〉
〒920-0963 金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580　Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

11月の休館日は
26日(木)～28日(土)です